

強制女体化調教NTRの目で彼女を犯されながら、俺もメスとしてイ
キ狂うまで

「ふぁ。よく寝た。」

朝日に照らされながら朝を迎える。

ふわりと甘く柔らかい匂いが鼻腔を着く。

隣から「んっ。」と可愛らしい声が聞こえる。

その可愛らしい声の主が「おはよう。カイ。よく眠れた？」と微笑んでくる。

「おはよう、リリア。うん。体力も回復してる。」

と俺はその柔らかい身体に顔を埋めた。

小さく華奢な体の割に大きな胸が俺の顔にふわっと当たる。昨日、リリアを抱いたまま眠りに落ちてしまった。リリアは体を布団で隠しているがその柔らかく華奢な腰も弾力のあるおしりも手を伸ばせばすぐに触ることが出来る。全て俺のものだと実感したくて手を伸ばす。

「もう。」とリリアも満更でも無い表情で受け入れる。

「それより。今日はどうするの？」とリリアが聞いてくる。

「村人の情報だと昨日の祠の奥に中級魔物が巣作っているらしい。そこを取り除かないと村は安全にならない。」

「だよね。今日はもっと奥まで行こう。」リリアは強い声を出す。俺としてはこのままリリアともっとくっついていたかったのだが。

俺とリリアは異世界に飛ばされてひと月ほど経つ。最初はこうしたらしい

のか全くわからず四苦八苦していたが、ステータスを見る限り俺は剣士でリリアは僧侶に向いていることがわかった。俺が前衛で敵を薙ぎ払い、リリアが後方で補助魔法や回復魔法でサポートする。連携もすぐに取ることができ、中級ミッシェンくらいならふたりだけでもこなせるようになっていた。

なぜこの世界に飛ばされたのか、どうやって現実世界に戻るのかまだ全くわかっていない。それでもリリアとふたりならどんな場所でもやって行けると信じていた。

祠の奥は邪気で満たされていた。

「大丈夫か！？リリア。」俺は後ろを歩くリリアに声をかける。

「大丈夫！前気をつけて！」リリアの声が帰ってくる。

チラリと振り返ったリリアの装備が目に入る。この世界の装備は重厚であれば防御が高い訳ではないようで、リリアの装備は短パンと丈の短いＴシャツになっている。短パンからはスラリと白い足が伸び、Ｔシャツからはチラリとヘソが見え隠れしている。形のいい胸も白いＴシャツに強調されている。もっと防御が高いアイテムも手に入れられたのだがそれはビキニだったリナーズ服だったり、この世界の基準を疑うようなものばかりで俺はリリアを守るから大丈夫とそのような装備を着せずに旅を続けていた。

そんなリリアに少し目を奪われた瞬間だった。当たりが黒い霧に覆われる。

視界が見えない。認識魔法でリリアの位置を素早く察知する。気配を感じる。大丈夫だ。そう思った瞬間痺れるような感覚に襲われガクツと体の力が抜ける。「カイ――」甲高く叫ぶリリアの声を最後に俺は気を失ってしまった。

意識が戻った時に最初に感じたのは冷たい感触だった。石で出来た床に座らされていて手と足を鎖で繋がれている。力を込めるが身動きが取れない。魔法もなにかの力で封じられてるようだ。俺の装備は剥ぎ取られていたが裸という訳ではなかった。下着と肌着は身にまとっていた。

「目が覚めたか？」

低い声が耳に届く。顔をあげ、声の方向に目をやるとそこにはぼんやりと影のようなものが立っていた。顔は見えない。こいつが俺らを襲った敵なのかと身構える。が、身動きは相変らず取れそうになかった。

「リリアはどうした！？」

俺は咄嗟に声を張り上げる。影の敵はクククと笑っていた。

「心配するな。あの女は殺していない。」そう影の敵は答えた。信じていいものか分からなかったがとりあえず安堵する。

「リリアはどこだ。」

質問を続ける。

「あの女は逃がした。ここに連れてきたのはお前だけだ。」

「にが、した？」　　「どういふことか分からなかった。捉えるなら女の子であるリリアではないのか。」

「お前を捕らえた理由もあの女を逃がした理由もいずれわかる。」　影の敵が言う。

「今価値があるのはお前の方だ。」　　「言いながら影の敵はゆっくりと近づいてくる。」

影の敵は俺の目の前に経つと値踏みするのうに頭からつま先までじつくと眺めてくる。

影が手を伸ばした。指先が俺の額に触れた瞬間、熱いものが頭蓋の中に流れ込んでくるような感覚がした。叫び声を上げようとしたが、声にならない身体の内芯から、何か書き換えられていくような、得体の知れない恐怖が全身を駆け巡る。

次の瞬間、俺の身体が内側から熱を帯びた。骨が軋む音が、自分の耳に聞こえる。筋肉が収縮し、引き伸ばされ、再構築されていく感覚。腹の奥が妙に疼き、胸のあたりが熱く腫れていく。

手が、腕が、足が丸みを帯びるように変化していく。肌着の下にある胸が

大きく膨らみ肌着の形を変える。下着の下にあった感触はどんどん失われていくのが感じられた。

「なにをしたっ!？」

その声が、自分のものだと思えるまでに少しの時間を要した。明らかに高い女の子の声だった。体の変化や声の変化から察することができた。これは女体化の魔法だ。そのようなものがある事は知らなかったが、この世界ならあってもおかしくは無い。どうして俺にそんなものを掛けたのかは分からなかったが、徐々に変化していく俺を見て影の敵はほくそ笑んでいた。

「見てみる。」

影の敵が何も無い空間に指で四角を書く。するとそこに鏡が現れる。そこに映っていたのは見知らぬ女の子だった。俺だと言われたら面影があるかもしれないが完全に女の子の容姿だった。華奢な肩。細い首。少し色が薄くなった髪。瞳の色は変わっていないのに、全体の印象は別人だ。胸はリリアと比べても大きく膨らんでいてはしたなく思えた。下着をつけてないから肌着からでもわかるピンクのチクビがピンと立っている。下は下着をつけているからわからないが恐らく男性器は無くなっている。

「これが……俺、なのか……?」

声が、完全に変わっていた。高くて、弱々しくて、まるで他人の声だ。俺は鏡に映る自分の顔から目を離せなかった。可愛らしい、と誰かが言いそうな顔。唇は小さく、頬は柔らかく、全体的に幼さを残したような輪郭。

影の敵が指で顎を持ち上げる。ジロリと顔を観察されていることがわかった。

「中々いい出来じゃないか。あの女には敵わないがお前も女としてそこそこ可愛いぞ。」影の敵の声にゾクリとする。俺はその言葉をまだちゃんとは理解できていなかった。

影の敵が離れていく。ホッとしたのもつかの間部屋に手下であろうオークが3体入ってくる。嫌な予感しかない。

「俺はいくら可愛くてもお前には興味が無い。まあこの先抱いて欲しいと懇願することがあれば性奴隷にしてやってもいいが。」クククとほくそ笑んでいる。そんなことがある訳ないだと否定しようとするがこの状況に声が出なかった。

「いつまで虚勢を張ってられるかな。」

影の敵はそういうと部屋を出ていった。残されたのは女体化した俺とオ―

ク3体だ。

オーク達はジロジロと俺を観察するように見てくる。

「これが元男なのか？」

「なかなか可愛い出来じゃないか。」

「はあはあはあ。」

それぞれ好き放題言っている。俺は唇を噛んで、視線を逸らす。だが、鎖で固定された身体では、隠すことすら出来ない。胸の先端が冷氣と視線の両方に晒されて、小さく硬くなっているのが自分でもわかった。股の間も、妙に熱を持っている。

手が伸びてきた。ゴツゴツとした緑色の手だ。「ひいっ。」と思わず悲鳴のような声が出る。むにゅっと胸に触れる。ゾクリと鳥肌が立った。

「まじでさえ。」とオークは嬉しそうに笑いながら胸を揉んでくる。

「やめ……ろっ……んっ」思わず声が漏れる。悔しかった。抵抗出来ない状況で体を弄ばれている。今まで感じたことの無い女性としての快感が体を駆け抜ける。

オークの指が乳首に触れる。ビクンツと大きく痙攣をし「んあっ」と声が出てしまう。なんだ。これは。身体中に電気が走ったような感覚。それでいて気持ち良かった。

いつの間にかもう一人のオークがお尻をまさぐっており、あともう一人のオークは嬉しそうに太ももに舌を這わせていた。悲鳴が出そうになる。それなのに、オークの指がチクビに触れ、舌が敏感な太ももを這い、お尻を揉みしだかれるだけで悲鳴じゃなく喘ぎ声が溢れ出てくる。「らめっ、やめてっ。」抵抗しているようには思えないような甘い声色。オークはそんな声にも興奮を覚えるようで止めるどころかどんどんエスカレートする。

知らない間に俺の衣服は破り捨てられていて全裸になっていた。全身をオークよ舌で愛撫されている乳首もお尻も。そして太ももを舐めていたオークが股間に頭を寄せてくる。その太く硬い舌がクリトリス触れる。「んあああっっ。だめっ……イッちゃうっ」ビクンッビクンッと、大きく痙攣し絶頂してしまった。オークが身体から離れるが余韻でまだ体は軽く痙攣していた。

「さっきまで男だったくせに、もう立派に女の絶頂を迎えてるぜ？こいつ。」見下し蔑んだような目で俺を見ている。オークなんて今まで何匹も倒してきた。格下だと思っている相手に今は手も足も出ない。

「ああ。よほどの変態なんだろう？よがりまくって甘い声出してたもんな。」と他のオークが言う。キツと睨みつけるが効果はなかった。

「まだ始まったばかりだ。これからが楽しみだな。」とオークは言う。と三休とも笑いながら部屋を出ていった。

静寂な部屋で一人残される。衣服は破り捨てられ何も身につけていない。触られていた胸や乳首は腫れて赤くなっていた。その場で身を小さくして涙を堪えた。泣くもんか。ここを脱出してリリアを助けに行く。

夜は、意外なほど長かった。

手足を鎖で固定されたまま、俺は石の台の上で動かずにいた。魔力の灯は落ちず、部屋は常に青白く照らされている。時間の感覚が曖昧になる。ただ、変わってしまった身体の間違った感覚だけが、異常に鮮明だった。

胸の先端は、冷たい空気に触れ続けるうちにずっと硬く尖ったままだった。僅かな風が吹くだけで、そこを中心に甘い電流が走る。何もしていないのに、乳首が小さく収縮して、疼くように脈打つ。股の間は、先ほどの舌の感触を思い出しては、勝手に熱を帯び、割れ目の奥がくちゅ、と小さな音を立てて収縮を繰り返す。熱い雫が内腿を伝って、ゆっくりと石の台に落ちる感触があった。

「……………」

低く呟いても、声は女のものだ。鏡はまだ俺の正面に浮かんだままで、動くたびに華奢な身体が映る。白く細い首、鎖骨の下から緩やかに膨らんだ胸、ピンク色に色づいた先端。くびれた腰から、丸く張り出した尻の曲線。そして、脚の付け根に開いた薄い色の割れ目。そこが、既に少し湿って光っているのが、鏡越しにはっきりと見えた。

眠ろうとしても、眠れない。身体の疼きが邪魔をする。リアの顔を思い浮かべては、すぐに今の自分の姿と重なってしまう。彼女に、この姿を見られることだけは耐えられないと思った。

「おいっ！朝だ。起きろ！」そんな声で目を覚ました。いつの間にか眠ってしまっていたようだ。眠い目を擦るとぼんやりとした視界の中にゴブリンがいた。反射的に魔物だと認識し攻撃態勢に入ろうとする。が、手足は鎖に縛られており身動きは取れなかった。

「おいおい。いきなり物騒だな。」とゴブリンが言う。「俺がお前の身の回りの世話だった見張りをしている。」そう言い終えると小学生くらいの体を揺らしながら食事を運んでくる。ミルクと食パンのようだ。食事が提供されることには少し驚いたがすぐにゴブリンが察したのか「死なれても困るかな。」と付け加えた。

頭を回転させる。食事の際、この鎖が解かれたら素早く動きゴブリンを倒して逃げる算段を考える。が、そんな考えはお見通しだった様子だ。ゴブリンが食パンを取り上げると俺の口に持ってくる。あくまで鎖はさずさないということか。「俺みたいなゴブリンじゃ一撃でやられてしまうからな。」とまた考えてることを読まれたかゴブリンが答えた。仕方が無いのでゴブリンに差し出された食パンを口だけで噛みちぎり食べることにした。昨日の夜から何も口にしていなかったからか自分でも驚くほどがつついてしまう。

「それにしても。」とゴブリンが話し出す。「お前昨日までホントに男だったのかよ。」と言いジロジロと身体を見てくる。その視線に嫌悪感を感じる。「そうだよ。昨日まで、男でリリアという彼女と冒険をしていた。」と答えた。ゴブリンに対してなら強気に返事ができた。

どうやらボスの下にオーク、その下にゴブリンという序列なのか、ゴブリンは俺の体をジロジロ見るだけで触ってこようとはしなかった。それでも食べながら揺れる大きな胸に歓喜の声をあげたり、興奮していることは間違いない。その身体に見合わない程大きなチンコがいきり立っているのが視線の端で見えていたから。

「ミルクを飲ませてくれないか。」俺がそういうと身体を見ていたゴブリンが視線をあげた。目が合いヤバイと感じる。ゴブリンの目は血走っていた。興奮しているのがひと目でわかる。浅い皿を準備したゴブリンはそこにミルクを注いでいく。「飲め。」と短く言う。手足を鎖で縛られている俺は地面を這うように、まさに犬のように皿に口をつける。喉の乾きを潤すため必死になっているとゴブリンが後ろに移動していることに気がつく。そこからは、突き出したお尻がありアナルやマンコまで丸見えになっているはずだ。恥ずかしさで顔が熱くなる。それと同時に下半身にも熱を感じた。興奮して勃起する感覚とはまた違う。見られているだけで濡れてくるのが分かってしまった。「おお、すげえほんとに変態だなこいつは。」ゴブリンは俺に聞こえるようにわざとそう言っている。舌だけを使ってペロリペロリとミルクを飲み進めるが上手くない。零れたミルクが胸から滴り落ちる。ひと通り飲み終わる頃には身体はミルクで汚れてしまっていた。

食事を終わるとゴブリンは名残惜しそうに食器を片付けて部屋を出ていった。オークとは違い制限を多くかけられている様子だ。腹も満たされ少し安堵する。それと同時にリリアを案ずる。俺を助けようと無理をしてなければいいが。

また狭い牢屋で一人きりになった。シンと静まり返っている。トイレに行きたい。そう思い部屋を見渡すがそれらしきものは無い。そもそも鎖で動けない。我慢するしか無かった。身を振りながら押しっ子を我慢する。振る度に下半身が擦れて感じてしまう。我慢の限界に近づいていたがちょうどそのタイミングで昨日のオークのひとりが様子を見にやってきた。昨日のどのオークなのかは判別できない。オークが俺を見てなにか言う前に「トイレに行かせてくれ！」と俺が声を発した。切羽詰まった声だった。オークは一瞬考えるような素振りをしてからニヤリと笑った。

「トイレに行かせてくれ。か。お前はまだ自分の立場が分かってないようだな。」とオークが言う。謝らなければならないと思いつながらも変なプライドが邪魔をして言葉が出てこない。

「まあいい。今からゲームをしてクリアすることができたらトイレに連れて行ってやる。」オークはそう言いながら床に寝そべっている。何をしているのかわからなかったがその時に鎖が外される。逃げることも頭をよぎったがおしっこを我慢している状態でオーク相手に逃げ切れるとは思えなかった。俺が逃げないことを確認したオークは「顔の上に跨がれ。」と言ってくる。

「顔には付けずに少し浮かせておせ」と付け加える。何を言っているのか理解することが出来なかったが、我慢も限界が近い。俺は恥ずかしさを押し殺

しながらオークの顔にまたがって腰を浮かせる。

「なんだあ？もう濡らしてるのか？」オークはケラケラとバカにしたように笑いながら言う。

「うるさい！早くゲームをはじめろ！」あまりにもギリギリな状況に語彙が強くなってしまふ。

「ゲームは簡単なもんだ。今の体勢で五分我慢できたらトイレに連れて行ってやる。」中腰の体勢は決して楽ではないが五分ならなんとかなる。女性化して筋力は明らかに落ちていたが体幹に関してはあまり変化がないように思えた。大丈夫だと自分に言い聞かせる。その間にもオークの鼻息がアソコに当たり刺激してくる。「くっ。んっ。」と声を漏らしながらも我慢する。トイレを我慢していることと見られていること。そのふたつを耐えなければならなかった。

三分程がすぎただろうか。さすがにキツくなってくる。それでもあと少しだ。現実的に可能な時間に設定してくれるあたり優しいオークなのかもしれない。昨日のことがあったのでそうは思えないが。

「腰が下がってきてるんじゃないか？」オークのねっとりした声。その声とともに生ぬるい息がアソコに当たる。オークの言葉には耳を貸さず、腰が落ちてきていることにも気がついて残りが残り一分耐えれば俺の勝ちだ。

そう思った瞬間、少し気が抜けて決まったのかもしれない。不意にオークの舌が俺のアソコを舐める。ビリビリと強い快感を覚え「んああっ」と大きな喘ぎ声を出してしまう。そしてそのままオークの顔に腰を下ろしてしまった。時間はまだ経っていない。負けた。そう思った瞬間緊張して張り詰めていた糸が切れたように尿意が襲ってくる。ジョボジョボと、オークの顔に直接出してしまう。「うおっ。しょっぱくも甘い。最高のご褒美だ。」とオークは俺のおしっこに溺れそうになりながらも喜びを感じていた。

どんなことであれオークに負けた。今まで何体、何十体と倒してきたオークに。俺はオークの顔から降りるとその場にへたり込んだ。

「昼にまた来るよ。」と言いつつオークは去っていった。部屋に残るアンモニア臭と屈辱で俺はその場から動くことができなかった。

放心状態の俺は、しばらくして部屋に入ってきたゴブリンに視線をやることしか出来なかった。もう昼時なのかと認識する。ゴブリンは部屋に充滿する匂いと状況を見て「またかよ。悪趣味だな」と零した。あのゲームはオークの趣味だったのかもしれない。悪態を着きながらもえろい視線は俺を捉えていた。ゴブリンの視線が胸からお腹、アソコへと移るのがわかる。それで

も俺は動けなかった。ゴブリンは抵抗を示さない俺の鎖を少しだけ緩めると目の前に食事を置いて見張っている。俺は無気力にそれを頼張った。ゴブリンは意気消沈している俺を心配しているのか「そんなんじや昼からもたないぞ？」と声をかけてきた。返事をする気にはなれない。それどころか昼からまたなにかあるのかと気が滅入ってしまう。無理やり食事を流し込む。「せいぜい潰されないようにな」とゴブリンは言い食器を片付け、部屋を出ていった。

昼過ぎ予想はしていたがオークがやって来た。

「どうだ？女の体には慣れたか？」とマジマジと見ながら言ってくる。

「慣れるわけないだろ！早く元に戻してくれ。」俺は食事を取り少し体力が回復したからか強気に出た。

「中々の精神力だ。女体化してこんなにもはしたなくヤラシイ身体になっていると言うのにまだそんなことが言えるのか。」感心しているのかバカにされていいのかわからなかった。

「少し予定を変更しよう。午後からはまた、お前が女であることを自覚させる調教を行う。」オークが近付いてくる。

「ボスにお前のリリアとやらを見せてもらったが、そのリリアと比べてもは

したないと思わないか？こんなにデカイ胸をぶら下げて。」
突然リリアの名前が出て反応してしまう。

「どうしてリリアのことを！？」

「それに関してはボスに直接聞いてくれ。それにまだリリアとやらの身体はちゃんと見られていない。それでもちよいどいいお椀型のおっぱいなのは装備越しにもよくわかる。」ニヤニヤと笑いながら言ってくる。

「そんなことよりお前の調教だ。昨日だけでも女の体がどれほど敏感なのかは理解しているだろ？ここを少し触るだけで声が出てしまう。」オークは話しながら俺のちくびを抓る。「んあぁっ」と思わずオークの言う通り声を上げてしまう。

「情けないな。本当に男だったのか？もしかしてリリアに虐めてもらっていたドエム男なのか？」辱めるようなことを言われ体が熱くなる。

「そんなんじゃない。んあっ」

否定するが、オークの手の動きに合わせて、自分で聞いていても可愛いと思う喘ぎ声が出てしまう。オークが俺の足をM字に開脚させる。抵抗するにもオークの力には敵わない。アソコが露わになってしまう。

「やはり、これくらいのことどこまで濡らしてしまうなんて。お前変態の素質あるな。」別のオークがやって来ると俺の股に顔をツッコミ舐めてくる。

「やめろっ…んあっ…だめっそこはっ。」

喘ぎ声を上げ続ける俺にオークは声を落とし続ける。

「分かっただろ？お前の身体はもう女として出来上がっている。さっきのゴブリンもそうだし俺らにもエロい目で見られるだけで興奮する変態女だ。今もオークにクンニされ盛大に感じてるもんな？認めたら楽になれるぞ？自分が変態な女だと。」

舐められ続けばーとする頭にオークの声後落ちてくる。その言葉通りこの快楽に身を任せてしまえばどれほど楽だろうかと考えてしまう。ここから出られないならいっそ女として快楽に溺れてしまえと。その時頭にリリアの顔が思い浮かんだ。優しい笑顔。感じながら恥ずかしそうにする顔が大好きだった。

「俺は…リリアを助けるまで負けない。」

快楽に耐えながらそう答えていた。

「ふーん。中々やるじゃないか。」とオークが感心したような声で言う。この手法で何人もの人を落としてきたのだろうか。

「心まではまだ堕ちないか。だが、身体は別だ。」オークはそういうと自らもチクビに舌を這わせ出す。全身に電撃が走る。チクビとクリトリスを同時に愛撫され快感が増していく。さっき思い浮かべていたリリアの顔はすぐどこかに行ってしまう。気持ちいい。その一心だった。

「だめっそこっあんっ…きもちいあっ…あっイクツ…いっちゃうっ…んんあああ

あっ」

俺は腰を反らして盛大にイッてしまった。

ハアハアと肩で息をしていた。視界の端でオークが何やら言い合いをしている。

「もういいじゃねえか。俺はもう我慢できねえ」目を血走らせながらオークが主張している。

「バカか！ボスの計画ではそれはまだだろ？それに今日の進捗は想定より悪い。」

「くそがっ！」オークが怒りをあらわにしている。

「大丈夫だ。計画では明日決行する予定だ。それまでは溜めておけ。」オークの中にも序列があるのか、怒りを露わにしていたオークはその言葉に従い怒りを収めた。

今日はこれで終わりなのかと思ったが、オークはおもむろにある道具を取り出した。それを動けない俺のチクビに装着する。電源が入れられると同時にチクビを吸われる感覚に襲われる。さらにアソコにパイプを入れられたのが分かった。そちらと起動している。継続的な快感が襲ってくる。

「なにつ、あつ、するんだっ、んあっつ。」言葉になかなかならない。「オークは「女を自覚するまでは快感に溺れさせてやる」と言葉を残して部屋をあとにした。」

何度イッただろうか。身体中のパイプがし絶え間なく振動している。チクビもアソコも刺激され続けて感覚がなくなってきたのに快感だけは波のように押し寄せてくる。痙攣し半開きの口からはダラシなくヨダレが垂れている。

「情けない。こんなやつがリリアの男だとはな。」男の声にビクリと反応する。男の気配は全く感じなかった。相変わらず顔は影でぼやけていて見えな
いが俺を連れ去ったボスと呼ばれる男だ。「外してやれ」と手下に命令する。
ボスのそばにいる部下はゴブリンやオークではなく人型をしていた。

「立派な変態女に育ってるようだな。」上から売春婦でも見るように蔑んだ
目で見てくる。俺は睨み返すが体には力が入らなかった。

「リリアはいい女だな。」ニヤリとしてボスが言う。

「リリアになにをした。」凄んで言ったはずが高い声のせいで怖くは聞こえない。

「今はまだ。とも言っておこうか。リリアはお前を助けるために奔走して
いる。こんな情けない姿をしているなんて知らずに。」

ボスが宙になにやら四角を描いていく。モニターのようなものが現れる。

「リリア!？」

モニターの中のリリアに声をかける。が、過去の映像なのか全く届かない。リリアはギルド（仕事を受けるところ）で切羽詰まったようにたくさんの人に声をかけていた。相方が影のような敵に捕まってしまった。と。大抵の人は一度はリリアに耳を貸す。が、影のような敵という単語が出た瞬間逃げるように去っていくようだった。そこに雰囲気のある男がリリアに近付いていた。少し長めの黒髪をしたそいつはどこか闇を抱えているようで顔ははっきりと確認できなかったがイケメンに思えた。

「あれは俺だ」影の男が言う。

画面の中の男はリリアに紳士的に声をかける。「どうかしましたか？」そのスマートな声にリリアも少し落ち着きを取り戻していた。リリアは事の経緯を俺に説明する。

「影のような敵……ですか。それはまたやっかいですね。」と男が言う。

「そんなに強いのですか？」とリリアは聞くが男は「あまり素性が分からない。最近現れた敵みたいですよ。」と答えていた。

「そう……ですか。」と意気消沈気味のリリアに「私でよければパーティを組みませんか？お見受けする限りあなたは補助や回復得意のようだ。前衛で戦う僕とは相性がいい。カイさんをふたりで助けましょう。」と右手を差し出す。リリアはぱっと顔を明るくして「いいんですか！？」と言い「ぜひお願いします。」と男の右手を掴んだ。

「リリアに近づいて何をするつもりだ!？」

リリアの無事を安堵すると同時にこんなやつに傍にいられるリリアが心配になる。

「目的か?それは答えられない。強いて言うなら俺は全てを手に入れる。」と力強く答える。全て:いやな予感がする。

「続きを見せてやろう」と男は指を鳴らした。別のシーンが映し出される。見慣れた風景だった。よく利用していた防具屋だ。この防具屋は実はいが、露出度の高い防具を多く取り扱っていたのであまりいいイメージはない。更衣室のカーテンが開く。「これはちよっと:どうなんですか?」と顔を赤らめているリリアが出てくる。その姿を見て唇を噛んだ。この男の目的はこういうことなのかと怒りを覚える。リリアはほとんど下着のような防具を身につけていた。その防具が性能が高いのは知っている。店にいる男の視線がリリアに注がれている。それもそうだ。白く形のいいお椀型のおっぱいが丸見えで、お腹はもちろん、布が少ないのかお尻も半分くらいはみ出ているような状態だ。「どうとはどういうことだ?」男は興味ないと言わんばかりに冷たい声音で言った。「いえ。でも少し恥ずかしいかなと。」リリアはそう答える。男は「しかし、それが一番性能が高いのだぞ?カイクンを助けたくないのか?」と淡々と言う。リリアの目付きが変わる「助けたい!カイク

こと、絶対に助ける！」とその防具を受け入れた。

「リリアは素晴らしい身体をしているな。」と男は笑いながら言う。「それに単純でどこか抜けている。いくら性能が高いとは言ってもこんな防具つけてる女は見たことがない。お前と同じで変態なのかもしれないな。」と男が言う。怒りが湧き上がってくる。「それは俺を助けるため！」そういう俺の言葉を遮るように「ああ。そうだ。お前を助けるためリリアは変態みたいな防具をつけて胸を揺らしながら訓練に励んでいたぞ。」馬鹿にしたように言ってくる男を睨みつける。「お前も精神力だけは立派なようだな。こんな身体にされてもまだ抵抗できるとは」男が指をこちらに向けてくる。そこから伸びる触手のようなものが、俺の身体を這う。

「いやっ、んあっ、だめっあえ」触手が体を這うのは一瞬だった。ヌルヌルとした触手がチクビやクリトリスを擦り、腔の中にまで侵入してくる。女の快感に落とされるのは一瞬だった。ビクンッビクンッと痙攣し簡単にイッてしまう。

「やっぱりお前はリリアには相応しくない。こんな情けないやつにリリアを任せることはできないな。」ビクンビクンと痙攣する俺を見下ろしながら男が言う。言い返すことができなかった。いつの間にか触手が消え、男も部屋

から出ていった。俺はどうしても、感じてしまう自分の身体を抱きしめながら震えていた。

次の日の朝。浅い眠りから覚める。ゴブリンが食事を運んできていた。やはり触れることを許されていないのか視姦してくるだけだった。それでも今の俺の身体はゴブリンの、視線にすら興奮してしまう。ニタニタと笑うゴブリンに大切な部分を見られながら食事を進める。

食事後、身構えていたが前日までのようにオークは来ていない。少しほっとすると同時に張っていた緊張が少し抜ける。逃げないと思われているのか檻の周りに見張りもない様子だった。実際、腕力も魔力も落ちていることが自分でわかっている。恐らくこの扉に傷すら付けられないだろう。突然出来た時間でリリアのことを思い出す。元の世界でのリリアの笑顔や、リリアを抱いた時の恥ずかしそうに顔を赤らめながらも求めてくるような表情。そのどれもがすぐに思い出せて愛おしい思い出だ。それなのにすぐ後に頭に浮かんだのは昨日のリリアだった。変態のような布の少ない下着同然の防具を身にまとい、胸を揺らしながら訓練しているのだろうか。嫌な妄想が頭を巡る。男が

教えることを口実にリリアの、後ろから腰の当たりを支え体を密着させる。訓練の動きの中でリリアの胸が男に当たる。そんなような妄想が頭を巡ってくる。ムラムラと興奮を覚えてしまう。リリアが他の男といるところを想像して体が熱くなる。俺は周りに見張りがいないことを再度確認すると、自らの手で胸を揉んだ。リリアのより大きくだらしなくも見える程大きな胸。その胸を自分で揉み、チクビにも指を触れさせる。「んっ。」と小さく喘ぎ声を上げてしまう。熱くなった身体を収める術なんてわからずに夢中になっていく。自らチクビを摘んだり擦ったりする。あの触手の感覚を思い出していた。自然とクリトリスにも指を伸ばしていた。「あっ。リリアっ。」頭に思い浮かぶのは男に弄ばれるリリアの姿だった。俺なんかじゃもうかなわない強い男に抱かれているリリア。嫌なのに。興奮が止められなかった。

夢中になって弄っていると上から液体が落ちてきた。ドキッとしてその方向に目をやる。オナニーに夢中になりすぎて全く気がついていなかった。屋根があるはずのそこには無数の窓のようなものが浮かび上がっていた。奥から数体のゴブリンが覗いているのがわかった。

「キャッ！」思わず女の子のように驚き体を隠す。「バレたか」「バレてもいいじゃねーか。」「アイツホントに男か？可愛すぎるんだが」と口々に聞こえてくる。いつのまにかゴブリンの集団に覗かれていたようだ。冷静になっ

て落ちてきた液体に目をやる。それは精子だと遅れてすぐにわかった。「やべえ。我慢できねえ。」と上から聞こえてきたかと思うと今度は俺の胸にポトリと白くドロっとした液体が落ちてくる。

「ひっ」と声を上げてしまう。逃げようと身体を動かそうとした時、昨日の触手のようなものがぬるりと俺にまとわりついてくる。俺を大の字に縛り上げるように触手が固定していく。上からは全て丸見えになっているだろう。これだけならまだしも、触手が俺の身体を這って行く。チクビやクリトリスを刺激され俺はドンドン喘ぎ声を大きくさせていく。それに呼応するように見ていたゴブリンも興奮を増していく。「やべえっ!」「イクッ!」と次々にゴブリンは言い、精子が落ちてくる。胸やお腹、顔にまでかかる。抵抗しようにも身動きは取れない。俺はゴブリンの精子を受けることしか出来ない。それどころか触手に触られぶっかけられて興奮している変態のようだ。

終わったゴブリンから窓が閉められていき、全ての窓が閉まる頃には俺の身体はベトベトに汚れていた。何度イッたかもわからない。時間はいつの間にか夕方になっていたようだ。影の男が部屋に入ってきた。

「見るに堪えない姿だな。」男はそういうと俺に魔法をかける。見る見るうちに俺の体は綺麗に浄化されていく。

「どうだ？自分の身体が性的に見られ、自慰行為のおかずにされる気分は」
低い男の声に俺は答えることができなかった。

「リリアは無事なんだろうな。」

「ふん。まだ堕ちずにリリアの心配が出来るか。そこだけは認めてやろう。」

「

男はリリアの安否を語らずまた空間にモニターを出す。城の入口のようなところが写し出されている。俺が囚われているところだろうか、モニターを凝視していた。そこに入ってくるリリアとイケメンに変装した男の姿があった。

「これはリアルタイムの映像だ」と男が言う。「分身を使っている。今リリアという俺もお前の目の前にいる俺も正真正銘本物ということだ。」分身でどちらも実態を保つのはかなりの高度魔法のはずだ。そんなことよりもリリアが助けに来てくれた事実となにか悪い事がおきそうな予感で感情がグチャグチャになっていた。

「そこで顛末を見届けろ。」男はそういうと姿を消した。

「ココにカイが居るのですか？」リリアの声だ。音声までも鮮明に聞こえてくる。

「ああ俺の調べではその影の男の、アジトがこの城だ。だが気をつけろ、罠が張り巡らされているはずだ。」

男は本当にリリアを案じるかのように言う。

「はい。ユウキさん」とリリアは力強く答える。あの男はユウキと名乗っているようだ。

画面の中のふたりは最初の部屋に入った。

次の瞬間、廊下の床が淡く光り、二人が同時に足を取られた。

「きゃっ……!!」

リリアの体が前に傾く。男が素早く彼女の腰を支え、倒れずに済む。だが、その姿勢のまま、床から甘い香りの煙が立ち上った。

「これは……催淫の罠、か」

男の声が、わざとらしく慎重に聞こえる。煙はすぐに二人の周囲を薄い霧のように包んだ。リリアの頬が、ゆっくりと赤く染まっていく。息が少し乱れ、胸元が大きく開いた装備の中で、胸が上下に揺れ始めた。明らかにリリアの体に変化が起きているように見えた。顔を紅潮させ息が荒い。それを見た男が「大丈夫か!？」と声をかけ支えるようにリリアの腰に手を回した。

「んあっ。」

リリアの甘く切ない声が画面越しに耳まで届いてくる。

「悪い。催淫にかかっているからかなり敏感になっているようだな」と男は言い体を離す。

「いえ。私こそごめんなさい。こんなことでカイを助けられない。先に進みましょう。」と敏感になっているのを堪えながらリリアが言う。

「わかった。無理はするな。」と男はリリアを心配する素振りを見せ、先に進む。

その時だった。壁から複数の触手が伸び、二人の四肢を絡め取る。リリアが短い悲鳴を上げ、杖を落とす。触手は乱暴ではなく、むしろ丁寧に彼女の身体を持ち上げ、足を少し開いた姿勢で固定した。男も触手に縛られている形となっているがリリアのように身動きが取れないようには見えなかった。

「すみません。罨に気が付かなかった。」リリアは声をうわずらせながら言う。そうしている間にもリリアを縛る触手はリリアの身体を恥ずかしい体勢にして行く。両腕を頭の後ろで固定し、足は男に向かって大きく広げさせられている。

「あっ…やめてっ。だめっ。」リリアが触手の動きに合わせるように喘ぎ声を上げる。

「だめだリリア。動くとその分触手の、拘束が強くなってしまっ！力を抜いて身を任せるんだ。」男がリリアにアドバイスをする。

実際、リリアが暴れると触手が彼女の胸を優しく、しかし確実に揉み始めた。露出度の高い装備の上からでも、柔らかい肉が変形し、先端が硬く尖っているのが見える。下の短い裾は既にめくれ上がり、白い布が完全に露わになっていた。触手の一本が、その布の上からゆっくりと擦る。

「ひあっ……！　そこ、は……っ」

リリアの腰が跳ねる。催淫の影響で、感度が上がっているのだろう。白い布が徐々に暗い色に変わり、触手の軌跡を湿らせていく。男はすぐ傍らで、そ

の様子を静かに見つめていた。視線が、リリアの胸の動きと、股の間の変化を辿っている。

しばらくの間触手がリリアを弄ぶ。リリアを厭らしく腰を動かし避けようとするがその動きが男を誘惑しているようにも見えてくる。男の位置からはリリアのアソコが丸見えになっているはずだ。整えずとも薄く綺麗な陰毛。その中のピンク色の膣が丸見えなはず。グツと唇を噛む。リリアの大切な部分を他の男に見られていることが耐えりなかった。そして一切助けられないもどかしさでおかしくなりそうだった。

光が放たれたかと思うとリリアの身体から触手が消えていく。男は息を切らせながら触手に、向け魔法を放っていた。

「遅くなってすまない。」

男はリリアに駆け寄る。男はへたり込んだリリアに自分が来ていたマントを掛ける。

「大丈夫か？」と顔を覗き込んでいる。

リリアは顔を逸らして「大丈夫です。」と小さな子で答えた。顔が赤くなっているように見えた。

「どうする？少し休んでいくか？」男がリリアに聞く。

「いえ、大丈夫です。カイを助けなきゃ。」リリアが力強く言う。が、その実リリアの体からはまだ、催淫の魔法が抜けきれていないのか肩で息をしながら胸を上下に揺らしていた。さっきの触手の接触もリリアの感度を上げているように思えた。

次の部屋に入る。男が先導し、リリアが、その跡を着いていく。リリアはかなり男を信頼し頼りにしているように見えた。リリアが部屋のドアを閉めたその時だった。罨は後ろに仕掛けられていた。閉められたドアからまたもや煙のようなものが立ち込めている。男は咄嗟に距離をとったが、リリアはその煙を吸い込んでしまう。

「リリアっ！」

男が駆け寄る。リリアの肩を抱えて床に座らせた。彼女の息は荒く、額に汗が浮かんでいる。マントを取ると、黒い紋様は既に胸元まで到達し、装備の隙間から見える肌を濁った色に変えていた。

「これは……毒素の魔法だ。体内に直接入り込んでいる」

男の声が、低く沈む。リリアは苦しげに顔を上げ、か細い声で言った。

「対処は……ありますか……？ 体が、熱くて……変です……」

「ある。だが、普通の解毒では間に合わない。この毒素は、外から魔力で引き出さないと排出できない」

男がリリアの頬に手を当て、彼女の目を見つめる。

「俺が直接触れて、毒素を抜き取る。抵抗しないでくれ」

リリアは一瞬、躊躇したように見えた。だが、毒素の進行は速く、すでに声を出すのも苦しそうだった。彼女は小さく頷く。

「……お願いします」

男はリリアを抱きかかえるようにして、床に仰向けに寝かせた。露出度の高い装備の胸元を、ためらうことなく開く。黒い紋様が、柔らかな胸の表面を覆い、先端近くまで広がっているのが見えた。男の両手が、その肌に直接触

れる。

「んっ……」

リリアが小さく声を漏らす。男の掌が、毒素の紋様を辿るように、ゆっくりと胸の膨らみを撫で上げる。魔力を込めた手のひらが、肌の上を滑り、毒素を引き寄せていくらしい。黒い模様が、男の指先に向かって徐々に移動する。

「んっ。ごめんなさいっ。あっ」

リリアが小さく喘ぎ声を上げる。

「催淫がまだ残っているようだな。リリア、一刻を争う。無理に我慢せず声をだせ。」

低い声がリリアに言う。

リリアの身体は弓なりに反り、息が甘い色を帯び始めていた。胸の先端が硬く尖り、男の指がそこを通過するたびに、彼女の腰が小さく跳ねる。

「ひあっ……そこは……敏感、で……っ」

「我慢しなくていい。毒素が集まっている」

男の手が、さらに下へ移動する。腹を撫で、腰骨の上を滑り、やがて短い裾の内側へ入っていく。白い布の上から、股の間を優しく圧迫するように触れ始めた。

「や……っ、そこは……だめ、です……っ」

「毒素が、ここにまで広がっている。出さないと危険だ」

白い布が横にずらされる。男の指が、直接、リリアの割れ目に触れた。既に湿っているらしく、くちゅ、という小さな音が画面越しにも聞こえた。リリアの両脚が震え、膝が内側に閉じかける。男はもう一方の手でそれを抑え、指をゆっくと動かす。

「んあっ……あっ、あんっ……」

甘い声が、部屋に響く。男の指が、毒素を引き出すように、クリトリスを円を描くように刺激し、時折、入り口に浅く沈める。黒い紋様が、徐々に彼の

指先へ集まってくのが見えた。リリアの腰は、もう我慢できずに男の手に合わせてくねっている。

「もう少しだ。力を抜け」

男がリリアの耳元で囁く。指の動きが速くなる。リリアの声が連続した喘ぎに変わり、背中が大きく反った。

「だめ、イっ……イきます……っ！」

彼女の身体が小さく痙攣し、男の指の上で潮を吹くように蜜を溢した。同時に、黒い紋様が男の掌に完全に吸い取られ、煙のように消えていく。毒素は排出されたらしい。

リリアは床に大の字になり、大きく肩を上下させながら息を整えていた。装備は乱れ、胸は完全に露わで、股の間は男の指の感触を残したまま開いている。男は自分の指を一瞬見つめ、それから静かに布で拭いた。

リリアはすぐには動けない様子だった。男はリリアに寄り添っている。動き

出そうとするリリアに「無理をするな。」と言い休むよう頭を撫でる。リリアもそれを受け入れるように目を閉じた。

男に寄りかかるようにして休んでいたリリアが「もう、大丈夫です。」と動き出そうとする。よろけるリリア。男はリリアの腰あたりを支える。

「無理をするな。今日は休もう。ここからまだ先は長い。」

そう言う男にリリアは「わかりました。」と悔しそうに答える。

男が空中に手をかざした。魔力が集まり、廊下の一角に歪みが生じる。空間がねじれるように開き、小さな部屋の入り口が現れた。中には簡素なベッドが一つと、薄い照明だけがある。

「魔力を使いすぎた。一部屋しか作れなかった。すまない」

男がそう詫びる。リリアは入り口を覗き込み、ベッドが一つしかないことに気づいた様子だった。彼女の表情が、僅かに強張る。

「一つの部屋に、ベッドも一つ……ですか」

「ああ。今の俺には、これが限界だ。お前が先に休め。俺は入り口で見張りをする」

男はリリアの肩を押し、部屋の中へ促した。彼女は遠慮したように首を横に振る。

「私は大丈夫です。あなたこそ、先に……」

「いいから。横になれ」

男の声は柔らかかったが、手の力は強かった。リリアは結局、押しされるままにベッドの縁に座らされる。さらに肩を押され、仰向けに寝かされた。露出度の高い装備のままでは、胸の形がはっきりと浮かび、短い裾が太ももまでめくれ上がっている。彼女は慌てて裾を押さえ、視線を逸らした。

「……わかりました。少しだけ、休ませてもらいます」

リリアは目を閉じる素振りを見せた。だが、すぐにまた開け、男の方を見る。入り口に立ったままの男を、少し躊躇うような目で見つめたあと、彼女は小

さく口を開いた。

「あの……あなたも、休んでください。同じベッドで……いいですから」

その言葉に、男が静かに振り返る。リリアは頬を赤くしたまま、視線をベッドの空いたスペースに落とした。

「無理にでも、体力を戻さないと。次の罠に備えないと、カイを助けられませんから」

彼女の声は、小さくて、少し震えていた。催淫の残効と、解毒の快感の余韻が、まだ身体に残っているのだろう。男はしばらく彼女を見つめたあと、ゆっくりと頷いた。

「……そうだな。では、お言葉に甘える」

男がベッドに近づく。リリアが体を内側に寄せ、スペースを作る。男が腰を下ろし、隣に横になった。狭いベッドでは、肩と肩が自然に触れ合う距離になる。リリアの体温と、甘い残り香が、男の側にも伝わっているのが画面越

しにもわかった。

「少し、近くても……いいですか」

リリアが、掠れた声で尋ねる。男は答えず、ただゆっくりと腕を伸ばし、彼女の肩を軽く抱くようにした。リリアは抵抗しなかった。むしろ、僅かに身を寄せる。

「眠れるか？」

「……わかりません。でも、こうしていると、少し安心します」

リリアの声が、埋められるように低くなる。男の手が、彼女の肩から背中へゆっくりと滑った。撫でるような、落ち着かせるような仕草。リリアは小さく吐息を漏らし、目を細めた。

胸が痛かった。目の前の画面の中のリリアは安心してきつたように他の男の胸の中で眠っている。俺を助けるという気持ちは本物だろうが、男を信じ、気を許しているのも確かだろう。このままでは男にリリアを取られてしまう。

そんな思いが湧き上がってくる。

フツと空間が揺れると、そこから男が現れる。

「どうだった？ 一部始終見ていたと思うが」男が低い声で言う。

「見ての通り、リリアは俺に信頼を寄せている。お前にも聞かせてやりたいよ。俺の胸の中で眠るリリアの鼓動が早くなっている。」

「そんなわけない！」凄んで言うが、高い声で威圧感はない。

「必死な想いで助けに來た彼氏が女にされて、感じまくっていると知ったらリリアはどう思うかな？」

「くっ。」反論がでなかった。その代わり男を睨みつける。

「相変わらずいい精神力だな。」男はそう言うどゆっくりと俺に近づいてくる。マジマジと身体を觀察してくる。

「リリアよりだらしないイヤらしい身体つきだ。」と言いつつ俺の体に触れる。

「ひっ。」と息を吸う。

「リリアと同じことをしてやろう。そうだな。特別にそれに耐えられたらリリアは諦めてやってもいい。」男がそういう。

「ホントか……？」俺は内心疑いながらも聞き返す。

「ああ嘘は言わない。まあ耐えられたら話だけだな。」

男はそう言う、俺の胸に手を滑らせる。はじめは撫でるように。少しだけ身を振らせる。これに耐えればリリアを救える。こんな体になった俺に出来る唯一のことだ。男の動きにどんだんもどかしさを感じるようになってくる。男はあくまで乳房を触り揉んでくる。乳首には触れようとしない。それがもどかしくなる。息が荒くなり、身体が暑くなってくる。

「ひやあっ」思わず大きな声を出してしまう。フツと男の指が俺のチクビに触れた。その瞬間電撃が走ったように身体に快感が巡る。そこからは容赦なかった。一度触れるとそこからは激しい責めに変わる。片方の手で乳首を指で擦られ摘まれる。もう片方の手は下に降りてくる。お腹を撫でられ、そのままもっと下に。

「んああっ」大きく弓なりに仰け反って声を発してしまう。男の指がクリトリスに触れた。オークと違い優しく暖かい指。その指に触れられるだけで全て吹っ飛んでしまいそうなくらいの感覚が襲ってきた。しかし、リリアを思うとまだ耐えることができた。

男に容赦はなかった。クリトリスとチクビを同時に擦り摘んでくる。唇を噛んで快感を受け流そうとする。

「やはり精神力だけは褒めるに値する。」男はそう言ったかと思うと一気に

腔に指を入れてくる。ヤバいっ。そう思った。頭が真っ白になる。さっきまで頭に浮かんでいたリリアの顔はきりに覆われたかのように思い出せない。無意識に男の指に集中してしまう。

「だめっ…あんっ…そこはっ」

ゆっくりと腔の中の壁を指の腹で撫でてくる。身を振り必死なイクのを我慢する。

男が俺の耳元で囁いてくる。

「我慢するな、カイ。快感に身を委ねろ。ほら、イケッ」男はそう言う。腔の中を掻き回すように指を動かしてくる。俺の体はガクガクと痙攣し簡単にイッてしまう。

「だめっ…いくっ…いくううっ」

それでも男は指の動きを止めない。すると体の奥から感じたことの無い快感が波のように押し寄せてくる。

「いやっ…おかしくなっちゃうっ」

ビクンッビクンッと痙攣するとビチャビチャと水っぱい音が聞こえてくる。大量の潮を噴いてしまい男の腕を濡らしていた。

「これに耐えるだけでリリアを救えたのにな。残念だったな。」男の声に、

答えることができなかった。

「そんなお前にいい魔法をかけてやろう。明日はそれで楽しめ。」男が指をこちらに向けてくる。暖かいものに包まれるような感覚に襲われる。嫌な気分じゃなかった。むしろ大きな安心できるものに包まれているような感覚。

「な、なにをした。」

「リリアの感覚をお前に同期させた。お前が今感じている感情はリリアのものが入り込んできている。」

俺は慌ててリリアが映る画面をみる。リリアは完全に男に身を預けるようにして眠っている。この包まれるような安心感がリリアの感情？信じたくなかった。でも。男がそういう魔法をかけたと言っただけならそうなのだろう。俺はイカされた疲れと、リリアから同期される安心感に力が抜けてしまいそのまま眠ってしまった。